

No.131

公民館だより

平成19年11月
宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

地域のちから

由良地区公民館長 飯澤登志朗

「老後備え若いうちに」

皆さんは何を想像されますか。老後に対する不安から預貯金を計画的にと思われた人が多いのではないのでしょうか。

『男性に定年後の夢を聞くと、妻と旅行三昧、ゴルフ三昧、釣り三昧というのが多いようですが、これらは二年もたつと色あせてくる場合が多く、老後の健康のため家事やボランティアなど毎日出来ることを若いうちから始めておく方がよい。という意味です。』

以上は新聞記事の一部です。

当由良地区では高齢化が進み

地域活力は減退しているようですが今年まだ年半といえ地域のパワーを強く感じています。

六月「由良川てんころレーズ」地域の皆さんのボランティア活動により大勢の参加者と一緒に盛大なイベントを楽しみました。

八月、記録的な酷暑のなかで開催されたKTR由良駅前の友情ライブ。特設ステージで行われた美しい演奏に暑さを忘れて聞き惚れていました。

九月、地区運動会に結集され

た各部のパワーは見事に発揮され二部（宮本自治会）の連覇となりました。

小学校の全面的なご協力や、中学生の活躍等があり、特に中学生の活躍は優勝を左右するポイントゲッターとなり注目を集めていました。

二年目に入った京都府立大学による学外演習では地域の活性化に向けて活発な交流が図られ歴史や食文化、観光に至るまで研究が進められています。

また地域の懸案事項である診療所関係では地域の力が行政を動かす目標に着々と進んでいることが報告されています。

このように色々な活動を通して由良地区の底力は十分に余力を持っているといえます。

過日、宮津市で教育施設再編検討委員会が催されました。

由良小学校では児童の減少から複式学級が導入されていますが、これ以上減少が続きますと学校統廃合も視野にしなければ

ならない時期が来たのでしょうか。

地域から学校が無くなるのは寂しい限りですが子どもは大勢の仲間と一緒に勉強や遊びをすることが大切という意見にも傾聴する必要があります。

連日報じられます殺伐とした事件、コンビニで万引きの末、殺人という事件や、親が子を、子が親を殺す。こんな世の中です。「なさけない」。一言で表現すればこんな世の中なのかも知れません。

人口減少に歯止めがかからず田畑の荒廃や環境問題の悪化等地域の課題は多くありますが、地域のちからを結集して安心、安全で住みよいまちづくりを励みませんか。

由良地区には十分その力はあると信じています。



行事報告

主事 磯田 充亮

◎六月十七日(日) 由良川てんころレース

天の橋立で実施していた当レースを由良の「まちおこし」にしようと、昨年「由良川てんころレース実行委員会」を設立、公民館は「地域協賛事業」として参加、主に競技進行全般を担当しました。

当日は地元は元より近隣市町や他府県からの参加を含め40チーム200名以上が出場し多数の応援で賑わっていました。公民館は受付、進行、審判、出発、放送、記録等を担当し、事故もなく全般的にスムーズに終了出来たことに対し選手始め関係各位に感謝しています。競技中、選手の中に再会を誓う人達が見受けられました。再開を希望します。

◎七月一日(日) 四部対抗バレーボール大会

第二十八回大会を由良自治連合会と共催で開催しました。今年もソフトバレーボールを使用9人制で実施、男女112名の参加がありました。

ボールの特異な動きにも反応し白熱した試合となりました。男女とも三部がワンセットも落とさず各部に勝ち、男子は昨年が続いて連勝、女子は18回連続優勝を成し遂げました。

優勝	男子の部	女子の部
準優勝	三部	三部
三位	一部	一部
四位	二部	二部

◎八月十四日(火) 四部対抗ソフトボール大会

連日の猛暑が続くなか当日は久しぶりに曇り空、微風のグランドで若さ溢れるプレーの連続。

特に優勝戦で6対5で迎えた最終回の裏逆転し6対7xで終わった試合は記録に残る好ゲームでした。勝った一部は昨年引き続き連続優勝を遂げました。結果は次のとおりです。

優勝	一部	三位	四部
準優勝	二部	四位	三部

◎八月二十六日(日) 盆おどり大会(地藏盆)

子供地藏盆に併せて今年も実施、オーブニングに綾部市物部の有志による「創作太鼓」が披露されました。

盆おどりには、えいへいや踊り等の演奏で盛りあげてくれましたが、遠くで雷が鳴り雨模様で参加者が少なく早仕舞いをしました。伝統行事を守るため皆様のご協力をお願いします。

◎九月九日(日) 由良地区運動会

各自治会、小学校、中学校のご協力を得て二年に一度の運動会を開催しました。

みんなが楽しめる運動会を合言葉に、開会式には宮津マーチングバンドの出演で華を添え、従来表彰に準優勝杯を加えました。

今回は各部とも得点を重ね最後のリレーで順位が決まる接戦となり、中で応援が勝った二部が前回に続き連続優勝を遂げました。

優勝	二部	リレー成績
準優勝	一部	三部
三位	三部	一部
四位	四部	四部

事故の無いよう注意していましたが競技中複数の怪我が発生しましたことをお詫びし、再発のないよう注意して参ります。

由良てんころろレース&由良楽市 が終わって

由良自治連合会長 野村 孝行

由良実業会から由良を元気で活力のある地域にしようとした第一回由良川てんころろレース&由良楽市です。この企画を由良実業会から由良自治連合会に話しかけられ、由良活性化の為に一緒に致しました。

実施時期について、検討した結果、海水浴シーズン中は忙しい時期でもあり、又風等考慮して六月十七日に実施することに決定した次第です。梅雨時期でもあり由良川での開催することにも問題点多々あり心配しておりましたが、当日は天候、風ともこの日しかないと思われる様な最高の天候に恵まれましたのは関係者皆さんの常日頃の精進の賜ものと感心しております。

井上宮津市長様をはじめ、奥田丹後広域振興局長様、竹中商工会議所会頭様等各関係者多数の方々のご来賓を賜り又遠方から四十チーム、式百名の選手に参加、式千五百人と予想を大幅に上回る来場者で賑わい盛会のうちを終了することができました。これも一重に由良実業会の皆さんはじめ各種団体の皆さん、又二百名余りのスタッフの方々の並々ならぬご努力ご協力の賜ものと厚く感謝致しております。

レース競技に全力を出しながら残念ながら入賞出来なかったチームも楽しい思い出になったことと思います。優勝された「宮津与謝消防Aチーム」おめでとうございました。さすが

に消防訓練で鍛えた成果と感じました。コスチューム賞に輝きました「ANDDOてんころろ友の会チーム」のユニークな結婚式のスタイル衣装で登場され、会場を楽しませて頂きました。

毎年実施する予定として地域の皆さんにアンケートをお願いいたしました結果、大変良かった・よかった・まあまあ良かったがてんころろレースでは八十五・九%、由良楽市では八十八・七%とのまずは御好評を頂いたものと感じております。

しかしご意見の中には厳しいご意見(時期・運営・催し・会場等)も頂いております。次回開催についての検討課題として生かして頂きたいと思っております。又、由良楽市では最初でもあり来場者等の予定が難しく量不足で一部で売り切れが生じ、ご迷惑をかけました点反省の材料になりました。

何分にも最初でありゼロから

の出発でもあり、多くの方々のご協力がなければ到底開催も危惧されるところでしたが、是非ともやり遂げる意欲と頑張りで実施することが出来ました。

関係者、地域の皆様のご支援ご協力によるものと有難く感謝いたしております。

由良川てんころろレースが定着し地域の活性化が図られ、自然豊かな由良川を守り親しみ、少子高齢化が進む中地域全体で助け合い協力して活力のある由良になることを願っております。

最後になりましたが各種団体、地域の皆さん、又華を副えて頂きました舞鶴高専、宮津高校、海洋高校、東舞鶴高校の漕艇部の皆さん、由良小学校の花笠おどり、由良えいへいや踊り保存会の方々には大変お世話になりました。有難うございました。厚くお礼を申し上げます。

地域づくりにつなげる 環境共生教育の実践

京都府立大学 三橋 俊雄

今日、地域において人と自然が深い関係性の中で共生してきた生活技術・生活文化を、次世代にどのように継承していくか、またその価値を当該の地域づくりのように活かしているかが、地域から大学に求められている課題の一つといえるでしょう。

そうした想いを抱いて、一九九八年より宮津市養老地域において八年間、「野に出て生活を学び地域の光をデザインする」学外演習を、延べ二百五十名の学生の参加を得て実施してきました。昨年からは、宮津市の要請を受けて、由良地区にフィールドを移し、地域活性化につなげる学外演習を、夏季、冬季に開催しています。

本年度は、二〇〇七年八月三日

日から七日までの五日間、環境デザイン学科三回生を対象として、「由良の魅力再発見とエコミュージアムづくり」を、由良地区公民館を拠点として地元の方々にお世話・ご協力をいただきながら、実施させていただきました。演習には、京都府立大学学生十八名（教員一名）、滋賀県立大学学生七名（教員一名）、加えて本年より宮津高校建築科生徒十三名（教諭二名）の計四十二名が参加し、初めての高大連携の学外演習が実現しました。

今回の演習では、由良のかけがえのない「光・魅力」を、現代社会では消えかけている大切なもの、残していきたいもの、

これからも発信していきたいものとしてとらえ、それらの「光・魅力」を由良の方々にも、また由良を訪れる外部の方々にも理解してもらい楽しんでもらうための、「まちぐるみ博物館Ⅱエコミュージアム」であるとして、次の六つのテーマを掲げ、調査を行いました。「一班、九名」七曲八峠と奈具海岸の魅力調査、「二班、七名」由良の農具・民具の魅力調査、「三班、七名」宮川の自然、散策道の魅力調査、「四班、四名」北前船の歴史と船頭の心意気調査、「五班、十名」駅裏エコパーク開発構想の調査・提案、「六班、四名」由良の食文化調査・提案。

初日は、まず、由良地区を大バスで巡りながら、山椒大夫屋敷跡、みかん畑、由良神社、如意寺、七曲八峠、グンゼ保養所など、由良の特色を概説いただきました。さらに、夜のミーティングでは、由良自治会、公民館、婦人会、実業会、歴史を

さぐる会、食改善推進委員、農業委員の方々十五名にお集まりいただき、明日からの学生によるテーマ別調査に関して相談させていただきました。

四日から六日までが、実質的な調査です。一班の峠調査では、地元の方々の先導で、古道をふさいでいる竹や枝を斧やのこぎりで切り払いながら、茶屋跡の石垣や崩れかけた石橋に往時の峠道のにぎわいを感じ、また、鹿や熊、イノシシの痕跡を見つれたり、「ウラジロ（植物）」の群生に歓声を上げたりしながら、由良石の採石場跡を通って、KTR鉄道の橋脚がそびえ栗田（くんだ）海岸を臨める「三枚橋」まで、約四時間の行程を無事踏査しました。二班の農具調査では、トウミ（唐箕）、手押し種まき機、スキ（鋤）やクツゴミ（藁沓）などの昔の農具を調査票にスケッチし、その仕掛けや使い方などを聞き取りました。三班の散策道調査では、由良を流れ

る宮川、大迫川の自然と散策道の魅力を調査し、サワガニやサンショウウオを探したり、草ずもう、笹ぶね、ゼンマイ飛行機などの草遊びも体験しました。四班の北前船調査では、航海の安全を金毘羅神社への絵馬奉納や女房たちの毛髪を奉納して祈願した、海に対する由良人の切なる思いを伺い知ることができました。五班のエコパーク構想では、駅裏の深田を利用した自然体験学習型の施設や空間デザインへの提案を行いました。六班の食文化調査では、「あずきざい」「のっぺい」「てっぼう和え」「タニシの佃煮」など、郷土の料理づくりや新しい食材の提案を行いました。

このように演習では、由良の歴史や自然と共生してきた人びとの暮らしの中から、潜在的な資源・価値を発見し、地域内外の、例えば由良住民の都市住民や学生との交流を通して、その価値を学び、伝え、共有してい



(1) 公民館長より由良の概要を伺う



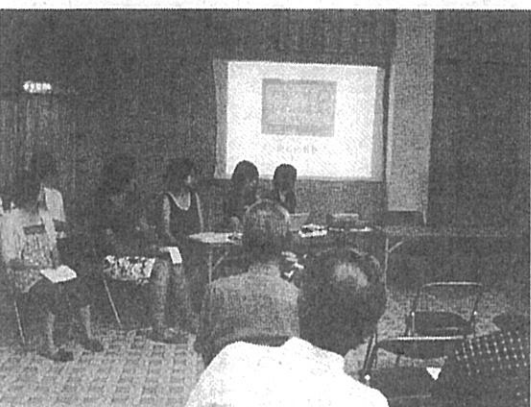
(2) 地元の方々との調査打ち合わせ



(3) 古道・七曲八峠の探索



(4) 調査データの整理と発表の準備



(5) 地元の方々を前にした発表会風景



(6) 発表会での講評と意見交換

くために、「地域の光をデザインする」「エコミュージアムによる地域づくり」という観点か

ら、元気で誇り高い地域になっ
ていただくためのデザイン（調
査・解析・創造的提案）をおこ

なっています。

芸術の秋、あそびの秋 楽しさを大人が伝え気がつかせたい

(子どもたちの力を引き出すために)

由良小学校長 山本文雄

私は秋が大好きです。食べ物
は美味しく、海・山・川・里に
は幸がいっぱいです。

暑くもなく寒くもない、湿気
の少ない空気がはだに合ってい
るように思われます。

それに、昔遊んだ数々の思い
出が次から次へと思い出され、
もう一度体験してみたいなるの
です。

そして、自分だけでなく、由
良小の児童にもさせてやりたく
なるのです。

がしかし、今の時代には、し
かられることばかり、安全面、
衛生面等を考えると無理でしょ
う。

でも、これらの話を通じて体
験しなくても、空想でもいい家
族が、その場の人々が楽しい雰

囲気になればと思いい、二、三の
遊びを書きます。

『⁺住み処^かの中でのやきいもつ
くり』

さつまいもの収穫が終わった
後の畑には、大人の親ゆびぐら
いのイモが残っている。そのイ
モを集めて私達で作った子ども
が二、三人入れるほどの住み処
にもつてくる。

住み処は夏の間につくってあ
る。海岸に流れ着いた流木や近
くの材木工場からとってきた板
などが材料である。砂浜に大き
な穴を掘ってくずれないように
板やトタンでかこみます。半地
下室のようで、屋根はあるが煙
突はない。

三々入りのブリキの缶にイモ
を入れ、その上から浜砂を入れ

少しの海水を入れ、火の上に置
く、そうして焼きイモづくりが
はじまるのです。

焼きあがったところあいをみて
缶を小屋から出すのです。

二人が小屋から出るやいなや
イモどころではありません。

二人が顔見合って、腹をかか
えて笑いこめてしまうのです。

友の顔はススで真っ黒け、鼻
の中まで真っ黒け。

『棚田の空中回転』

稲木からおろされ、脱穀のお
わったワラの束は、棚田の端々
に積み置かれていた。

稲木の下にあるものなら、稲
木に登り、七段目八段目の高い
ところから、ワラめがけて飛び
おりた。

ワラがクッションとなり、ひ
ざや足首を痛めることはなかつ
た。

棚田の土手の下にワラがある
場合、刈り終えた切り株につま
づかないように勢いよく助走を
して、土手に両手をつき、前転

して、下の田に着地をしていた。
調子にのつてくると、下の田
の着地点など確認せず、次か
ら次と棚田をさがっていった。

ワラなどなくても、田の土は
やわらかくて気持ちよかった。

大将は、一番先につっこんで
いくことが多かった。

「ボチャン……ベキツ……」

なんとワラでもなく土でもな
く、水の中に着地である。大き
なカメ(つぼ)もこわしてしまっ
た。白いズボンは黄色に染まり
体はくさく、服には何かがつい
ている。友の家来達は鼻をつ
まんで私に近づこうとしなかつ
た。私は急いで家に帰りお風呂
に入った。

その後の私の中学校生活は、
運がつき楽しいことばかりで
あった。

『河口のハゼ釣り』

大雲川には、ウナギ・フナ・
ハゼ・アユ・ドジョウ・モズク
カニがいっぱいいた。秋になる
とサケものぼってきた。

河口近くでは、ハゼ釣りを楽しんで。つり具店には、安い三本つなぎの竹ザオが売ってあった。

学校から帰ると、エサとなるミミズさがし、どこに行けばいいかはよく知っていた。

今は何処にいくととれるか見当がつかない。

次に仕掛け、金バリにおもり二、三個つけ、ムシカゴにウキをさしこみ、ウキがうまい具合に立つか調整する。なかなかウキが立たないし、沈んだりする。横にねたままの場合もある。

いよいよ釣開始、ハゼは砂の上、ミミズはハゼの目の前を流れるようにウキとおもりの間を調整する。

ウキとおもりの間が短かすぎると流れすぎて、ウグイやザコが釣れてしまう。

「ピクツ、ピクピク スー」

「今だー！」
細いよわい竹のサオがしなっている。

由良小学校祖父母学級

「ふれあいタイム」

六年 足立 涼

ぼくは、将ぎコーナーを選びました。

まず、直人君と将ぎをしました。でも、角で負けました。次に、佳大君とつみ将ぎをしました。だが、一分で負けました。くま田さんには、三十秒で負けました。動かしようがなくなり、「参りました。」と言いました。新宮さんには五分くらいで負けました。

二人のおじいちゃん、むちやくちや強かったです。

また、直人君としました。十五分くらいやって、いい勝負だったけど、負けてしまいました。貴大君とは、飛車で勝負が決まり、勝ちました。

将ぎを一年ぶりにして楽しかったです。

自分の攻め方で、後手でも勝

てることがわかりました。

また、やりたいです。

六年 大森美沙

九月二十五日の三、四時間目にふれあいタイムがありました。私は、「ちぎり絵」でした。くまを作りました。色を決めて、ちぎったりして、けっこう形がとりにくくて、うまくちぎれませんでした。でも、作っているのと、とっても楽しくなってきました、すいすい手が動いていきました。

教えてくださった方々も、ていねいにきちんと教えてくれてとても分かりやすかったし、うれしかったです。

そして、時間内に作れ、完成しました。その後で作った作品といっしょにみんな写真をとって、片付けをして、終わりました。

た。

六年生最後のふれあいタイムだったので、特に楽しく作る事ができました。それに、くまのちぎり絵が上手にできてよかったです。

教えてもらった方々にも、本当に、ていねいに教えてもらったので感じやしています。

今日は、本当に楽しい時間になってよかったです。

六年 岡野永莉

わたしが選んだ六回目のコーナーは「百人一首」でした。

家庭科室へ入ると六年生が六人だけで他の学年はいませんでした。わたし以外はみんな百人一首が初めてだったので、やっていくうちに慣れるということが始めていきました。

わかっているけどとれなかったり、とられたりしながら後半に近づいていきました。そのうちみんなも激しくなってきました。声を出したりしていました。

二回目の時はチーム戦でした。みんな慣れてきて、けっこう楽しんでいました。その後にはぼうさんめぐりをして終わりました。

ふれあいタイムはふだんしないことかもたくさんするので、これからも続けて低学年の人を中心に昔からの遊びの楽しさを知ってほしいです。これからはテレビゲームだけでなく、たくさん遊びを楽しみたいと思います。

六年 岡本昇磨

今日、三・四時間に祖父母参りの後にありました。

ぼくは、いご・将ぎでした。まず、よっちゃん和将ぎをして、一回目の王手は、防がれたけど、二回目は、よっちゃんを「王手。」と言わなかったら勝ちました。

そして、いごでは、負けました。今度は、くま田さんと将ぎで

勝負しました。ぼくは、たかひろ君といっしょにやっただけ負けました。

それに、いごは、ちょっとハンドをもらっただけど、六こ差で負けてしまいました。くま田さん達は、両方とも強かったです。いごとしようぎが楽しくできてよかったです。また、したいです。

六年 竹田真子

三、四時間目にふれ合いコーナーがありました。

私は百人一首をすることにしたので、家庭科室に集まりました。百人一首は六年生だけでした。

まず自己しよう介をして、さっそく百人一首をしました。私はあまりやったことがないので少し不安でした。

やってみるとカルタみたいで昔の言葉なので分かりにくいところもあったけど、楽しかった

です。二回しました。

次にぼうずめぐりをグループでしました。

グループは、私とえりちゃんとはるなちゃんの三人でした。

始めは順調だったけど、ぼうずが出てきて箱に入れました。後からは「姫でろー。」や「せみ丸出ろー。」と言って声がかかるまで盛り上がりました。せみ丸が出てきた時が一番おもしろかったです。

十二時ぐらになると放送が入ったので片付けました。

今年最後のふれ合いコーナーでとても楽しめてよかったです。

六年 中西奏実

三、四時間目に、ふれあいタイムがありました。

ちぎり絵、竹細工、百人一首、しようぎが、あります。わたしはちぎり絵です。クマを作りました。

色紙に、クマを書いて、顔、目、

鼻、ズボンなどいろいろな部分を紙に書きました。書いた線に、つめをあてて、うまくちぎっていきましました。すつごくむずかしかったです。

いろいろな色の紙を使いました。カラフルになって、とてもきれいになりました。

最後に、風船をはって、できあがりしました。ちょっと、失敗してしまいました。初めてだったけど、上手にできて、よかったです。文化祭にも出すので、見てほしいです。

六年 濱本もも

今日はどうしても楽しみにしていたふれあいタイム、私、真子、永莉、遥捺、真柳、和輝君が百人一首をします。まず百人一首をしました。ほとんどの人は知らなかったし、ひらがなでむずかしかったです。大森さんが言葉をよくくれました。最初は六人でやっていたけど、二回戦

目は二組に分かれました。私のチームは、真椰と和輝君です。とつてもスムーズにできて楽しくできました。

百人一首が終わって、次にぼうさんめぐりです。さつきとおなじチームでやりました。一回目、私は百枚中九十九枚とりました。あと一枚は和輝君がとりました。三回目もして、和輝君がいつぱいとつていたけどぼうが来て、最後の三回目に私が姫をとつて九十八枚とれました。あと二枚は、二人が一枚ずつとりました。

今日はとつても楽しかったです。またできる機会があったらたくさんしたいと思つています。

六年 濱野真椰

三、四時間目は、小学校生活最後のふれあいタイムがありました。

私は最初、ちぎり絵に希望していたけど、人数が多かったの

で、百人一首になりました。

場所は、家庭科室で三人のおばあさんに教えてもらいました。全員六年生で、六人いました。

初めは、みんなで練習をしました。しているうちに、やり方がわかってきました。

その後、二チームに分かれてしました。一回目よりも、取るスピードが速くなりました。

まだ、時間が残っていたのでぼうめぐりをしました。

札が、しつかりきれいでいなかったみたいで、ひめ続きだったり、ぼうず続きだったりして、手持ちの札が0枚になったりしました。二回したけど、二回とも、0枚や一枚でした。

初めての事ばかりだったけど、百人一首やぼうめぐりをやって楽しかったです。

六年 前畑直人

ふれあいタイムは将ぎでした。最初はりょう君としまし

た。りょう君の守りが弱くなつていつて勝ちました。

次に新宮さんと戦いました。やつぱりとても強くてどんどんせめられてボロ負けでした。やつぱり大人の人は強いなと思えました。

次にたかひろ君と戦いました。いつもの戦法でやると飛車をとられました。でも勝つことができました。

そして、次にチームを組んで大人と戦いました。でもよつちちゃんと組んだら、よつちちゃんが「10分もつて。」と言われて、よつちちゃんはやりませんでした。結局負けてしまいました。

その後、りょう君とまわり将ぎをやりました。金をころがして表になった数だけ進んだりするので運まかせです。最初はどんどん進化していったけどマイナスで退化してぬかれました。負けそうになったら終わりました。将ぎで勝つてよかったです。

六年 柘田佳大

三、四時間目のふれあいタイムで、ぼくは、将棋を選んでいたので、図書室に行きました。

まず、しょうまくんと将棋をしました。

と中、「しばらくうちにいいかな」と思つたけど、うまくだまされて、負けました。くやしかたです。

次は、しょうまくんと、囲碁をしました。

今度はぼくの圧勝でした。(囲碁をならつてるから、そりや当たりまえか。)うれしかったです。

次に、新宮さんと将棋をしました。でも、ものの五分ほどでやられました。ベテランさんは、やつぱり強いなあと思いました。

最後に、木村先生と回し将棋をしました。やっていると中に時間が終わって、引き分けでした。

教室に将棋ばんがあるので、たまに、みんなとやりたいです。

六年 山下遥捺

私は、「ふれあいタイム」で『百人一首』をしました。

私は、百人一首をしたことが無かったので、初めは、五枚しか取れなかったけど、二回目はチーム戦みたいなので二十五枚取れました。なんだか、成長したみたいでうれしかったです。

次に、そのチーム戦でいっしょにやっていた真子ちゃん・えりちゃんと坊主めくりをしました。

最初は、真子ちゃんがいっばい持っていたので、えりちゃんといっしょに「せーみまる、せーみまる。」と言いながらひいていったら、せみまるをえりちゃんがひいてみんな出して、最後は真子ちゃんがいっばい持っていました。

「ふれあいタイム」では、初めての百人一首ができてよかったです。

たです。

また、百人一首をしたいです。

六年 山田栞奈

今日の二、三、四時間目に祖母参観がありました。私はふれあいタイムでちぎり絵です。まず学年と名前を言って始まりです。人形とくまがあっただけ私

はくまにしました。まず和紙を選びました。くまのはだを茶色、手の平、足の裏、片耳を黄色、バンダナと耳と風船をピンク、服を青にしました。まず茶色にするところをなぞって、手でふちを切りました。服、風船、バンダナは、はさみで切つてのりをはって、はみ出しているところを、水で消してもらいました。

むずかしかったところは、目や鼻を切るときこまかくて切りにくかったです。あと手でちぎるときに破れそうになって、大変でした。

そしてかわいいくまの完成です。写真をとって色紙の入って

いたふくろに入れて先生にわたしました。

今日はとても楽しかったし、こんどは人形の方にチャレンジしたいです。

六年 吉岡和輝

ふれあいコーナーで、ぼくは、百人一首をしました。

最初の方は、よくわからなかったけど、二回目は、よくとれるようになった。でも、負けました。

つぎに、ぼうずめくりをやりました。

ぼうずめくりはしていたので、かんたんにできました。

一回目は、一まいと〇まいと、ほかせんぶでした。

二回目は、勝てそうだったけど、一まいと、一まいとほかせんぶでした。

楽しかったです。

平成18年度 人権標語入選作品

認めよう 人それぞれの 人格を

由良小学校6年(当時) 日比昌成

四部対抗バレーボール大会

中西 慶子

前回参加させてもらった時は確かまだ娘が小学校にあがる前だったように思うので、十数年ぶりにこの大会に参加させていただきました。

まずはコートの中の人がこのどなたなのか？の情報集めです。「あくいつも頑張っておられるなあ」から始まって、「ちよつと前と感じが違うなあ」

そして極めつけは、「えっ!?誰って?えっ、もうあんなに大きくなった?」と驚いた後にくる言葉は必ず「私ら齡とるわけやナア」です。悲しい事なのか、ここまで順調に齡を重ねてこれたと喜ぶべきなのかは分かりませんが、とにかく確実に時は流れました。

でも皮バレーボールからソフトバレーボールに変わりました。

だが、大会はハッスルプレー満載の活気のあるもので、どの地区も接戦の時は大声で応援し、フラインプレーには大きな拍手をおくり、珍プレー(失礼)では笑い…と、以前と変わらず楽しいものでした。

そして我が浜野路地区女子は、チームプレーの成果か今年も優勝することができました。大会に向けて一回行った男子との練習の時もそうでしたが、

いざと言う時の底力と持久力、これが私たちの特徴であり強味ではないかと思えます。平たく言うといわゆる「おばちゃんパワー」です。この大阪のおばちゃんに次ぐ力を子供たちのため、自分たちのため、由良のために発揮して、笑い声と笑顔の絶えない地域作りに少しでも役

にたてたらステキだなあと 생각합니다。来年も再来年も大会は行われると思います。今年残念にも参加いただけなかった皆さま、この次はぜひ一緒に楽しい一日を過ごしましょう。大会が近づきましたら声をかけさせてもらいますので、お若い方々も人生の経験を積まれた方々もどうぞご協力をお願いします。

最後に選手として活躍いただきました皆さま、ありがとうございました。

特に、浜野路男子チームで大活躍だった高校生の船野君、軽やかな身のこなしと強靱なボールさばき、観ていて感動し、思わずキャーキャー叫んでしまいました。(船野君のお母さんの声には負けましたが) 役員の皆さまもお疲れさまでした。

最後に選手として活躍いただきました皆さま、ありがとうございました。

ソフトボール大会

脇地区分館長 奥野 彰

八月十四日、恒例の四部対抗ソフトボール大会が今年も行われました。

も首を長くして待っていた事と思えます。

このソフトボール大会はお盆という事もあり普段由良を離れた仕事や、勉強に努めている人が帰ってきて久しぶりに顔を合わせそしてスポーツを楽しむ事ができる大会であり、皆さんと

どこの地区もそうだと思うのですが選手集めが大変だったと聞いています。脇地区の場合は体育部役員が青年会等に依頼をして集めてもらっています。一番大変な仕事をしてもらって本当にありがとうございました。

そして選手の皆さんを一番悩ませたのが暑さだったのではないでしょうか？

全国各地で記録をだした程の猛暑の中汗をぬぐい、

「あつい〜」

「あつい〜」

と口々に言いながらプレーをしていたのを思い出します。

去年一部（脇地区）は何年振りに優勝できとても喜んだのを憶えています。今年も優勝するぞと思えば若い学生さんを中心にプレーをし見事にV2を達成することができました。決勝戦もどちらが勝ってもおかしくない

程接戦でハラハラドキドキして

いたみたいで暑さとプレーと緊張感でとても疲れてたみたいでした。

ソフトボール大会のために、遠くからわざわざ四部対抗戦に地区の代表として帰ってきてくれた若い学生さんはあと数年で立派な社会人になると思いますが、由良を離れて仕事する事になってもお盆にはソフトボールの事を思い出して帰省したいなと思っていてほしいです。来年も楽しみにして帰って来て下さい。

来年もがんばるぞ。

運動会優勝について

小松賢輔

夏目漱石の著、「草枕」の冒頭にこんな下りがある。

「山道を登りながら、こう考えた。

智に働けば角が立つ。情を通せば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい。」

就職の道に入り、六十歳で定年を迎えるまでの約四十年間を振り返ると、由良で正味暮らしたのは八年余りであった。結局、昔ながらの人間なのか我が家を捨てることは出来なかった。だが、三十年間余り、都会生活をしながらこの「草枕」の冒頭が頭を離れなかったのも事実である。これが私の青春の人世感であった。

「草枕」の文章は、更に次のように続いている。

「(引) 越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくいところをどれほどか、寛容(くつろげ)て、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。」

私は由良で生まれて、由良で育った。そしてなまじっかりの財産を持ったばかりに、親からの世代を継承することが必要悪に思えてならなかった。田舎を捨て切れなかった理由がここにもある。漱石の言う、こんな生き方に「住みよくせねばなら

ぬ」と考えて、若い頃あこがれた夏目漱石の小説を文字通り歩んで、会社の転勤も拒否することなく、人世を地で行こうと考えた。これが転勤生活の始まりである。

「草枕」の後に続いて出版された、漱石の「明暗」では、「則天去私」の考え方に漱石は徹している。「天に従って私を去る。」「人間の醜さを、とにかく認めながら、私に流されず、揺さぶられずすべてを押し包んで許す」(中央公論社、日本文学、夏目漱石集、三巻、解説者、中野好夫より) と言う私なりの人世を考えた。これが私の三十年に渡る单身生活の切り札であった。

家族を故郷に残して家庭を顧みぬ、单身生活十七年を含めると三十年余り、就業上の問題もあって、気が付けば、福井・京都・神戸・奈良の転勤、家庭を顧みない都会生活になっていた。不器用な私は、空気なしに生

きては行けない世界に居ながら、そして家庭を省みぬ空気のような家族の存在を考え、約三十年間仕事一筋に駆け抜けた。

そして、定年を終え気が付けば、母親は六十三歳で病死・父親は九十歳の長寿を終え、二人の子供も都会に巣立って、頑なに自宅を守る家内だけになっていた。

それでも由良に住んでいた頃、由良地区の組織に参加させて頂いたこともある。

若い二十六才の頃であったと思う。由良消防団に入りながら、小学校の育友会役員・由良青年会（十日会）に所属し、二、三年会長としてお世話になり・藤本秀雄氏が公民館長をされていた頃、文化部に任命されて運動会の役員をしたことがあった。

毎週、何食わぬ顔で日曜日になれば由良に里帰りしていたので、よくあるサラリーマンの生活に思われたのであろうか。退

職して二年目、宮本自治会長と言う大役を授かるのである。こんな私であるからまるで、自治会が「浦島太郎」のような存在であった。

皆さまにお世話にならないと、地区の自治組織の流れなど判らうはずがない。今も地区の組織や流れを解ろうとして無我夢中である。私なりに、影ながら昔を思い出して一生懸命やって来た。むしろ、我武者羅なのかもしれない。

こんな中での優勝であった。各地区上げての盛大なイベントにもなり、伝統にもなった運動会で、総合優勝と四部対抗リレーも一位と言う、克つてない金・銀杯を手にすることができた。これも、地区の皆様のお陰だ。

優勝に向けて、地区皆様の一体となった姿に思わず熱いものを感じた。これも、地区皆様の一一致団結したご支援とご協力の賜物と感謝している次第だ。

今となつては、漱石の言う「住

みにくいところをどれほどか、寛容（くつろげ）る」処にした人世の気持ちに浸っている。

最後に、「雪が解けると水になる。」・「雪が解けると春になる。」と言う表現がある。同じ事柄をいっても、人の介在しない「雪が解けると水になる。」と云う言葉は嫌いだ。

「雪が解けると春になる。」と云う言葉の意味には、「モノ」を耕し一定の目的に従いその理想を実現する、その課程全てが運動会の夢にあつたと考えている。

「私達の先輩が代々築き上げてきた貴重財産を受継ぎ、これ

を次の世代に伝えて行く事が、

私達の世代に課せられた大切な義務であると思う。正しく受け継ぐと言うことは、申し上げるもなく、より良い文化財をつくりあげる為に努力する。」事だと、自分に言い聞かせながら、「住みにくいところをどれほどか、寛容（くつろげ）る」処にしたいと考えている。

酒の飲めない私でも、由良地区運動会の優勝を宮本地区皆様と一緒に成って、二つの優勝旗の下で、人には「まぐれですよ。」と言いながら快いお酒で酔いたいものだ。

由良松寿会について

熊田良雄

地域社会に奉仕する団体として、平成十五年に旧老友会から由良松寿会と名称を変え、会員の意識の改革に取り組んでか

ら早や四年半が過ぎました。お陰様で旧老友会から脱皮することができ、地区内外の有識者の方々からも大いに信用される組

織となりました。

この組織を今後大きく拡大し、会員の増強を図ることが、私達に課せられた大きな使命であり、目標達成のために更なる努力をしていかねばならないと考えております。

さて、平成十九年度の由良松寿会は次の事業を計画し、実行して行く予定です。

一、駐車場の営業（七月二十八日～八月十九日）

一、日帰り旅行（五月二十九日）野田川森林公園（グランドゴルフ）→加悦SL広場→ちりめん街道散策→尾藤家見学

一、社会奉仕の取り組み（九月二十日）由良海浜地区の清掃作業

一、グランドゴルフ大会参加（九月二十七日）宮津市民グラウンドで開催

一、宮津市老人クラブ大会参加（十月二日）歴史の館で開催

一、秋期日帰り旅行（十一月中旬予定）若狭小浜の旅、蘇洞

門めぐり、明通寺参拝他

一、みかん狩り（十一月下旬予定）下石浦岸田農園

一、養護施設（天郷園他）の友愛訪問（十二月下旬予定）

一、料理教室の開催（二月中旬予定）由良の里センター

一、ユニカール及び輪投げ大会（三月上旬予定）

その他いろいろ予定しておりますので、会員は勿論のこと会員以外の方でも参加を希望される方は、松寿会の役員までご連絡下さい。

由良松寿会は、高齢化の進む社会の中で過去の経験と知識を生かし、地域社会に寄与する幅広い奉仕活動を展開していきたくと考えておりますので、皆様方のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、敬老会には地区の皆様に変お世話になりました。ここに改めて厚くお礼申し上げます。

一 父の足跡を探して一 (完)

「西部ニューギニア慰霊友好親善訪問団」に参加して

三 嶋 昌 子

〔八月二十九日〕

今朝は九時に出発、午前中はインスロン小学校へ慰問の日である。団員各自が持ち寄った子供服や鉛筆、消しゴム、ノート等の学用品と、遺族会からはサッカーボールを持つての訪問だった。子供達の踊りで迎えられる教室まで案内された。教室では子供達との交流、日本語で「さくら」や「おぼろ月夜」を上手に歌って歓迎してくれた。バスに乗って帰る私達に、軒先にいた子供達が、雨の降りしきる中を駆け寄り、我さきに手を振って見送ってくれた。今まで味わった事の無い感激を子供達からもらい胸がいっぱいになった。キラキラした目とその情景が今も目に浮かんでくる。ここでも思わぬ声をかけられた。

肩を叩かれ「イワテ、イワテ」と先生らしき人が話し掛けてきた。ん？インドネシア語？と思っていると「イワテノヒトイル」と言う。「日本の岩手」と私が聞くと「そう」と答えた。「居ますよ」と言つて岩手より参加している人を呼んだ。こうなると皆友達、握手をよく聞けば一年間岩手へ研究生として行っていたとのことだった。又教室で私の横に座ってくれた五年生の女の子二人の内、マルカラちゃんとその日の夜行われた懇親会でもう一度会うこととなる。ホテルへ帰って昼食、直ぐにパライにある「第二次世界大戦慰霊碑」前で行われる全戦没者追悼式に出発する。ここでジャカルタから別行動となつていたB班の人達と合流、合同で

慰霊祭に参加した。ここは広々とした椰子の木に囲まれた会場に、立派な慰霊碑が日本の方角「北」を背に、建てられていた。会場には地元の人達の手でテントが設営されていた。毎回暑さのせいで倒れる人が出たということ、テントの準備をして頂いているそうだが、今回は曇りで涼しい中での慰霊祭となった。

勝間団長に続き全員が献花、黙祷をして全戦没者の霊を慰めた。前には青い珊瑚礁の海が開けていた。今回私が参加するにあたりそれを知った長男の家族がみんな折った千羽鶴を託してくれた。何よりも心のこもったお供えで本当に有り難く思った。個人巡拝、合同慰霊にお供えをした後は、慰霊碑の裏側にある納骨堂に収める様、勝間団長より助言を受けて中に収めさせてもらった。孫や曾孫達の心に父もきつと喜んでいふことと思ふ。西部ニューギニア・ビア

ク島などインドネシア周辺だけで八万人余りの戦没者があり、三百万余の全戦争犠牲者の上に、今の平和な日本があるという事、生きることさえもままならなかった時代が、この日本にもあったということはどうか忘れることの無い様に、今平和で暮らせることに感謝しこの平和を恒久に守って欲しいと、切に願ひながらホテルに



8月31日朝 ビアク島ホテルにて 地元の高校生と

戻った。その日の夜は合流したB班の人達と本日訪問した小学校の校長先生他二名の先生、代表の子供達十数人を迎え懇親会が行われた。その子供達の中に朝学校で私の横に座ってくれたマルカラちゃんの姿もあった。小さく手を振るとにっこりと笑顔が返ってきた。巡拝も全て滞り無くすみアルコールも日本を発ってから初めて解禁、みんなホッとしたのも手伝って会は終始和やかに、楽しいひと時を過ごすことが出来た。

〔八月三十日〕

いよいよビアク島を去る日が来た。朝食のためロビーへ行こうとすると、ヘイズさんが手招きで私を呼んだ「ミシマ日本語でサインをして」と言った。地元の高校生が、日本人のサインが欲しいとあって、早朝から三人ホテルに来ていたとの事だった。変な気持ちだったが漢字とひらがなで、三人が差し出すノートに名前を書きながら、こ

の中でひよつとして日本へ来る子が有るかもしれないと期待して、励ましの言葉を掛け別れた。

九時四十分ビアク島発の飛行機に搭乗。窓から遠退く島を見つめながら、心の中で別れを告げた。もう二度と来ることは無いだろうと思った。十一時二十分スラウエシ島(旧・セレベス島)ウジュパンダンに到着、バスで島を廻りながら、慰霊碑を見つけると巡拝をしながら地区視察となった。ここは稲作が盛んで田んぼが広がりに三回収穫できるそうである。又海老の養殖も盛んで日本にも輸出されているとの事だったが、今は乾季で養殖用の田んぼは水が枯れている状態だった。この後、十六時五十五分発の飛行機に乗って今日の内にバリ島へ行くはずだった。しかし飛行機のエンジントラブルで六時間ほど出発が遅れ、結局バリ島のデンパサールに着いたのは翌日午前二時過ぎ、ここで、この旅の最初

から今日まで本当に親身に私達をサポートしてくれたヘイズさんとお別れとなった。人間的にも素晴らしい方で、出会えたことに感謝し、握手をして別れた。ホテルへ直行。夜中三時によく就寝する事が出来た。

【八月三十一日】

バリ島のホテルの窓から素晴らしい朝日を見て目覚めた。食事をしてこの旅で初めて観光気分を味わう事となった。近代的な建物と町並みで日本人の若い観光客にもあちこちで出会った。バスも昨日までとは違ってきれいな観光バス、夜まで市内観光とショッピング。夜は空港近くの「福太郎」という日本料理店で一週間ぶりの日本料理を頂いた。材料は全て現地で調達しているそうだが、本格的な日本料理でやっぱり美味しいと思った。オーナーは日本人の方、店長も大島出身の方で、それ以外は現地の従業員との事。皆日本の名前が付いていて、中に「お

しん」ちゃんがいたのが可笑しかった。

バリ島二十三時五十五分出發。翌九月一日朝八時丁度羽田へ到着。九日間の旅も全員無事に帰って来る事が出来、皆で喜びあい、必ず一年後に又逢うことを約束してそれぞれの帰路についた。今回の旅に参加することが出来た事は、人生の節目に本当に有意義なことだったと思う。家族、会社とそして同僚、他多くの方々に協力いただいたお陰と心から感謝の気持ちでいっぱいです。又最初はそこまでは考えていませんでしたが、父の最期の場所を特定し、その場所まで連れて行っていただき、この手で線香をあげる事が出来たのも、日本遺族会関係者の方々の細部に渡るご心配ご尽力のお陰と、感謝しきれぬ思いです。姿は見なくても、父に逢って来たような不思議な気持ちを感じています。旅で出会った多くの人達の顔を思い浮



8月29日 インスロン小学校にて 子供達の踊りで迎えられる

かべながら、参加してよかったと行く迄の不安が嘘の様に清々しい気持ちの今日この頃である。

戦後六十一年、遺児といっても皆高齢者となり、その歳月の長さを改めて痛感し、薄れる記憶の中で戦争に対する危機感が無くなっていくのに不安を感じる昨今です。テレビでは毎日の

様に戦争の映像が流れ、人々の死が日常的に報道される中で、それを何の違和感も無しに聞いている怖さ、又戦争があった現実を知る機会も少なくなっています。衣食住が足りて、「あたりまえ」になった今、人と人とのつながり、ましてや親子の情までもが失われる事件を聞く時、「何故」と思います。今回の旅で最後の巡拝地「第二次世界大戦慰霊碑」には、次の言葉が記されていました。

「戦争がもたらした全ての結果とその悲惨さを再び繰り返さないよう全人類に想起させるためのモニュメントである」と。

「生きる」という事、「あたりまえ」という事がいかに大変で大切かを、今一度思い起こした旅でした。

過去があつて今がある事への感謝の気持ちを忘れることの無い様、今後の人生を歩んで行けたらと思います。

若者達に安定した職場を

山口 幸一

今年も敬老会によんでいただいた。主催者や関係各位の厚意に安易に甘えて、自分達の現在の立場をかえりみず忸怩たる思いも半ば出席させてもらっている。今回は高齢化社会に生きる私達のあり様について愚見を述べさせて頂くつもりであった。しかし原稿〆切りも迫った十七日の柚希ちゃん刺殺の朝刊の記事を読んで、私の思いは突如変わった。どうしてこんな無惨な事を、これが人間のする事か、私は絶句した。邪悪の刃はいつも弱者に向けられる。

かつては東洋の君子国と自負した日本のなれの果てか、“プレカリアート”最近しばしば耳にする言葉である。不安定雇用を強いられている人々という意味である。

昨今頻発する凶悪犯罪の

数々、その都度影の様につきまとう貧困の二文字、憂慮され、日本の未来に暗いカゲを投げている少子化問題も、このプレカリアートと深い関係がある。かつては一億総中流などと自惚れていたのに、今や一億総下流などと嘆かざるを得なくなつたのは何故か、すべて此のプレカリアートなのである。

国の平均所得の半分しか稼げない人々の割合を示す貧困率は日本のそれは、一五・三%と先進国中、アメリカ、メキシコに次ぐ世界第三位の高さに位置する、そして其の貧困層の四割が三十才から四十才までの勤労世代によつて占められているという。背筋の寒くなる様な現状なのである。なんでこうなる。それは“聖域なき改革”改革なくして進歩なし“威勢のいい

騒々しい掛け声と共に国は私達の前から、中小企業も商店街も農業も郵便局も、あげくの果てに長い伝統と歴史によつて培われてきた労働者の権利までも奪つていったからだ。かくして労働者の権利は極少になり、人間の生は完全に資本に牛耳られる事になった。

御用学者たちによつて構成された経済財政諮問会議主導の下に国際競争力のみを重視する経済界の要望のみを受け入れ、いわゆるビックバンと称する、労働契約法、労働者派遣法など労働者の生命と権利を守る規制を次々と緩和し、取り払つていった。漸くして企業は得たりや応とばかり正規社員のリストラをすすめ雇用調整弁として首斬り自在の非正規雇用労働者を大幅に増加した。今や全雇用に占める割合は三四%という。当然の事ながら彼らの賃金は下がる一方、景気回復の原動力となつた彼らなど眼中にない。数年前か

ら為政者達によつて声高らかに宣伝された景気回復も過去の回復期と較べて企業収益が労働者への配分に繋がらない。

労働分配率の低下はほとんど説明のつかない現状にあるという。これでは人は生きてゆけない、社会不安は増す一方である。誰もが安心して働ける職場をつくる事こそ何にもまして必要なのではないか。

美しい国の次なるキャッチフレーズは“自立と共生”“希望と安心”だそうである。

若者達が希望と夢をもって職業を選び、結婚し、安心して子供を産み育ててゆく事が可能な職場、それがあつてこそ貧困にまつわる犯罪も姿を消してゆくであろう。頭を悩ます少子化問題も過去の語り草となるであろう。労働不安の解消こそ私達の取り組む最大の課題であろう。自立と共生、記号と安心、いいキャッチフレーズだ。福田総理の手腕に期待したい。

子供地藏盆について

由良子供地藏盆世話人会 濱 本 喜 彦

毎年、八月のお盆明け週の日曜日に、松原寺さんの境内をお借りして、由良全地区の子供達を集めてみんなでその日一日何かをして一緒に遊ぼうと始めて八回目を迎えました。ここまで続けることができたのも、地域の方々の暖かい声援、支援の賜物と感謝しております。この場をお借りしまして、お礼を申し上げます。

さて、私が子供地藏盆に参加させていた頃、(僅か四・五年まえのことですが)小学生は全校生徒で八十人弱であつたと記憶しております。ところが、ここ数年で子供の数が急激に減少し、今年も全校生徒が四十名を切つてしまいました。少人数で大丈夫なのだろうか? 出し物の間はもつたらう

か?などと、ごく当たり前に

多人数IIたのしい・もりあがる少人数IIもりあがらない・たのしくないなどと、おじさんは勝手に数の論理とやらに毒されて心配しておりました。が、子供たちは元気です。少ないなりに精一杯楽しんでます。そんな姿を見るにつけ、おじさんはちよっぴり子供たちから元気をいただきました。子供たちの笑い声がある限りずっと地藏盆は続いていきます。そうあらためて感じたいであります。

そこで皆さんに提案があります。これからの地藏盆は、子供たちだけではなく、子供たちの親御さん、おじいちゃん、おばあちゃん、親戚の方々、近所の方々、とどのつまりは、地域の方々にも是非遊びに来ていただ

きたいと考えています。一年に一度は、童心に返つて子供たちと一緒に遊びましょう。そういった地藏盆をめざして、まあ、

ほちぼちですが来年も、八月のお盆明けの週の日曜日に、松原寺さんの境内で皆さんをお待ちしております。

広島市に原爆が投下された翌々日戦友が帰省した(I)

濱野路 大 森 孝

私達海軍兵学校78期生徒は、やっと待望の外出を入校以来、四ヶ月と一週間経って、学校のある防府市内へ午前中半日の許可がとれた。娑婆の土を踏んで外の空気に触れての闊歩はそれでも嬉しいものだった。

思えば三月二十八日、長崎県は西彼杵郡そのきの南風崎はえのさきで、瀬戸にむかった大橋を渡って、針尾海軍兵学校に入校した全国四〇〇〇名余の俊秀たちは、その後新聞等情報を得ぬ俣に生まれて始めてする艱難辛苦に耐えずら、只管ひたすら任官とエリート

の後は戦局の推移は全く途絶して判らぬ。程なくして、戦艦大和を中核とする帝国海軍の水上特攻部隊が、徳山(燃料廠

私、満十五才十ヵ月二十五日で、海軍軍籍に入っている。その後は戦局の推移は全く途絶して判らぬ。程なくして、戦艦大和を中核とする帝国海軍の水上特攻部隊が、徳山(燃料廠

があった)基地：山口県：を出撃した四月六日は、私たちの入校教育がまだ続いていた。十日が過ぎてから兵学校の課業が始まるのだが……。因みに私たちが江田島海軍兵学校本校での入学試験当時(一九四四年十二月十九日)呉の栈橋から江田島の小用に渡るのにアメリカ潜水艦が瀬戸内海に潜入しているのが警戒しろだった。

(※1 マリアナ沖海戦 一九四四年六月十九日より二十日の決戦で、空母艦載機のほとんどと潜水艦十八隻もが失われた)

私たちは現れるであろう友軍機や潜水艦に期待を繋いでいたのであった。近い中に屹度来てくれるものと。

兎にも角にも、市井の民間の人々に夏用二種軍装姿を見てほしいのと、娑婆の空気に少しでも触れて、情報が欲しい。思いの詰まった半日の外出(海軍では上陸)であった。軍需工場に

学徒動員をしている旧制舞鶴中学の級友の方が、情報に関しては私たちよりはるかに豊富に持っていたらと思う。

防府の外出した町は、今にして思えば、近くでは与謝野町の野田川地域のようで、田園地帯の向こうに街村状の家並みがあつて、私はその古本屋で世界文学全集の『ナナ・夢』なる仏文学の翻訳の箱入りのハードカバーの古い本を入手して、与えられた門限に間にあうようにして、喜び勇んで帰校した。(因みに、この購入したフランス文学本が、海兵生徒の読書対策になじまぬとして問題となり、分隊付教官預かりとなつて、漸く復員時手許に戻つた)。戦時中で出版の無い中で、私としては偶々英語学習で知つたイタリアのロミオとジュリエットの悲恋の延長線上で扱えた、いわば渴えたロマンへの願ひであつた。確か新潮社?だったと思うが、旧字でぎっしり詰まつた文字の

羅列は、辛抱して、休み休み読み続けなければならぬ、文章の味わいを理解するにはかなり苦勞した作品であつた。蔵書家の父や母の世代に買い求めた文学全集シリーズなのだ。

防府の町中への半日上陸は、細やかであつたが、この頃の娑婆の様子が垣間見えて僅かに民間と繋がつたようでも納得できなかった。殊に『ナナ・夢』を購入した古本屋には、私より一足先に定かでないが首都圏出身の他分隊の二人が入つていて、本棚の幾つかの中から、『テス』というのを選んで、他の一人が、「これが良いよ。云々。」今一人が「そうか、△△君もすすめていたか、じゃこれにするかな。」等々喋り乍ら、自信もつて、ためらわず文集全集テスを入手していった。そこで時間に限りのある私は、残り物の中から、フランス文学作品であるというだけで、中身も何もわからないまま、急いで小脇にかかえたのである。

防府には古本屋がちゃんとあつた。私の知る舞鶴西地区にはこんな構えの整つた店は軒もなく、少なくとも舞鶴よりは文化的にすすんだ街だと思つた。店の主人は、教養の深い女教師然として映つた。貫禄のある佇まいだった。

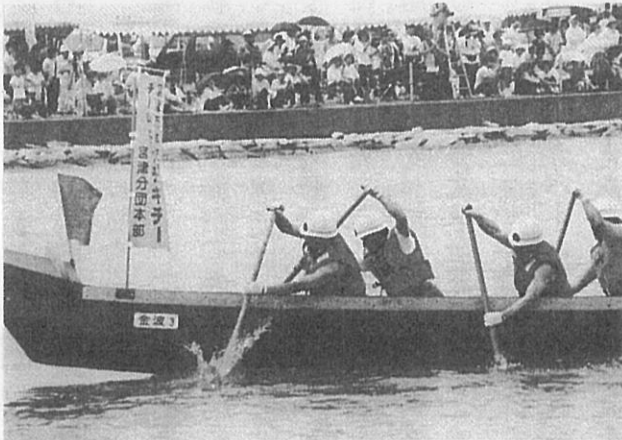
(平成十九年九月二日)以下次号

※1 『戦艦大和』岩波新書108 栗原俊雄著 文中 より マリアナ沖海戦

※2 毎日新聞 昭和20年8月8日付 『二十世紀の歩み』永久保存版2000

ミレニアム 新聞紙面で見ると...





編集後記

先日、本屋さんへ立ち寄った
ら「若者はなぜ3年で辞めるの
か」こんな本が目にとまり買っ
てきました。

私達の年代は、今の若い者は
辛抱が足らん。そう思うでしょ
う。20代、30代が感じる閉塞感
を少しでも理解できたらと思っ
ています。

小学生が「ふれあいタイム」
の感想を書いてくれました。

祖父母との出合いを素直な感
性で記してくれています。

三嶋さんの「父の足跡を探し
て」が(完)となりました。見
ることの出来なかつた肉親への
想いは少しは理解出来ますが、
末尾の「生きる」ことの大切さ
を共有出来たらと思います。

なお、途中に挿入のイラスト
は三森明氏の作品です。

(飯澤)